

「モノと情報」班 C

建築研究の可能性

—家屋・モノ・人間—

清水郁郎（総合地球環境学研究所・技術補佐員）

キーワード：東南アジア、建築、家屋、人間、モノ

調査期間と場所：国内、2003年9月～現在

Possibility of the Study on Architecture in “Material Culture and Digital Archives” Research Group: House - Things - Human Being

Ikuro SHIMIZU (Research Institute for Humanity and Nature, Technical Assistant)

Keywords: Mainland Southeast Asia, Architecture, House, Human Being, Things

Research site and period: Domestic, 9/2003-

要旨

この報告書では、おもに東南アジア大陸部を含めた諸社会の建築を対象とした研究について、学説史の簡単な整理と現在の到達点を示す。つぎに、「モノと情報」班において近い将来おこなうラオスでの調査に向けて、建築研究の文脈におけるモノ研究の位置づけと可能性について考察する。

1. モノ班における調査

秋道プロジェクト内の研究グループ「モノと情報」班（以下モノ班）は、ラオスを中心とするメコン河流域諸社会の物質文化を広く扱う。本稿の目的は、筆者がモノ班においておこなう建築、とくに家屋を対象とした調査・研究に先立ち、建築を対象としたこれまでの研究の見取り図を示すこと¹、建築研究の文脈とからめたモノ研究の可能性を検討することである。

ある社会における建築の分析は、そこに生きる人びとやその社会を理解するうえで有効である。それにもかかわらず、これまで建築研究における共通の問題意識は熟成されてこなかった。一地域あるいは一社会の建築や建築空間を対象としたすぐれたモノグラフもいくつか編まれてきたという事実はあるにしても、家屋もしくはより幅広い意味での建築は民族誌の一部として扱われるのみで²、中心的な問題ではなかった。

一方、建築学においては、近年になって、国外のさまざまな社会の建築を対象とした研究がおこなわれてきた。しかし、その多くにはいわゆるデザイン・サーヴェイの姿勢が共通しており、計画手法の抽出と保存におもな関心が向けられたことは否定できない。

こうした問題意識にもとづいて、筆者はモノ班において、家屋を主要な研究対象としていく。以下では、最初に、広く建築を対象にしたこれまでの人類学的研究で家屋がどのように扱われてきたのか、また、社会的、「文化」的にみて家屋がどのように問題とされてきたのかを概観する。

2. 人類学における建築研究の動向

1) 家屋の意味

これまで人類学では、家屋と人間の関係をとらえるためにさまざまなアプローチが取られてきた³。最初に取り上げるのは意味作用の側面から家屋と人間の関係を分析したもので、オランダの構造人類学やいわゆる象徴論研究としてくくられる視点がこれに該当する。

オランダの人類学者は、インドネシアの諸社会にみられる分類体系と空間の関係を人類学議論の俎上にあげた⁴。いわゆる「構造化された空間」の議論である。それは後に家屋分析の方法として多くの論考を生み出すもと

になった。「構造化された空間」として家屋を分析する視点は、家屋内部に見出される二分原理と住み手の双分観や社会の双分制の関係を探る方法、人間が空間を分割する方法が他のカテゴリーの分割と結びついていることをあきらかにする方法の二通りに分類される [佐藤 1989a: 118, 130]。分析上のこうした特徴は、たとえば、プルム (チン) の社会構造を家屋空間の分析を援用して論じたニーダム [Needham 1958, cf. ニーダム 1993: 64-72]、アトニの家屋を詳細に分析し宇宙論的な観点から社会とのかかわりを述べたカニンガム [Cunningham 1973]、北タイの民家において空間の配列と婚姻可能範囲、動物の食用禁忌との相互関係を分析したタンバイアらの各論考にみられる [Tambiah 1973, cf. リーチ 1976]。また、家屋そのものではないが、ボロロにおいて社会構造と村落空間の相互関係を構造的に分析したレヴィ=ストロースの視点なども、「構造化された空間」の議論に含まれるだろう [レヴィ=ストロース 1977b] ⁵。

「構造化された空間」の議論では、家屋が主要な分析対象となり、家屋の象徴的側面すなわち家屋の分析から得られる象徴の意味やその全体的な体系が分析されてきた ⁶。ニーダムは、ある社会における象徴体系を理解するために構造分析をおこなう意義を強調し [ニーダム 1993: 64, cf. Needham (ed.) 1973; デュルケーム 1980; 吉田 1983]、そうした分析において家屋の空間組織や各空間でおこなわれる儀礼的行為などに表象される諸概念が主要な対象であることを、プルムの家屋分析において示した [ニーダム 1977: 126-138]。とくに家屋空間は構造分析を可能にする素材のひとつとして中心的に扱われており、右や左、公的や私的といった空間にかかわる多様な分類観が、社会組織や自然観と並んで宇宙論的な秩序を構成すると考えられた [ibid.: 138]。

家屋空間の分析から抽出された二項対立的な諸概念が、全体としてより大きな宇宙的な概念 (「文化」の総体) に包摂されるといった視点は、後に家屋の象徴的な側面に焦点を絞った研究で数多くみられるようになった。もちろん細部は異なるとはいえ、それらの研究ではおおむね、家屋は、社会に通底する宇宙 (コスモス) 的な秩序と住み手のあいだを媒介する小宇宙 (マイクロコスモス) ととらえられてきたといえるだろう [e.g. Cunningham 1973; Fox 1973; Bourdieu 1973; Barnes 1974; Feldman 1977; 1979; 関根 1979; Kana 1980; Forth 1981; Izikowitz and Sørensen (eds.) 1982; Traube 1986; 鏡味 1987; Waterson 1990: 91-114]。

このように隆盛を誇った象徴論的な家屋分析だが、方法論的批判として、象徴の取り扱いに関する懐疑が提示されるようになった [佐藤 1989b: 93-94, 108-109, cf. スペルベル 1979]。たとえば、ウガンダやケニアにおいて家屋の象徴性を分析した長島は、その論考の中で自身の主観が混入する度合いを問題にしており、さらに空間概念を解釈するさいの判断基準の妥当性にも言及している [長島 1974; 1977, cf. 長島 1972]。ヌアウルの家屋を構造的に分析したエレンは、より端的に象徴の取り扱いについて注意を促している [Ellen 1986]。エレンは、観察者によって恣意的に選択された象徴を、過度に固定化して家屋と関連づけることに疑問を提示する。そして、整合化された宇宙論的イメージとは裏腹に、家屋の中では、現実には多様な象徴が並存していることや、それらが必ずしも整合性をもたないで全体性を保っていることを指摘した ⁷。

たしかに、二項対立の組み合わせを喚起するような象徴は、ある脈絡における組み合わせを抽出したにすぎない。「二元的象徴分類 (dual symbolic classification)」のかたちには要約できる宇宙論的なモデルを、家屋の分析から過度に抽出すれば、そのモデルに適合しない多くの脈絡が捨象されるのは当然であった [杉島 1988: 200-202, cf. Needham 1973; Waterson 1990: 168]。こうした方法論的懐疑を経て、家屋の象徴論的分析はその有用性を残しつつも表舞台から消えていった。

一方、家屋空間の象徴分析から、家屋と人間あるいはその身体との相互作用へと向かった視点もある [Bourdieu 1973; プルデュ 1990: 211-231; Moore 1996]。その嚆矢は山口のリオに関する論考にみられる。山口は、住み手の諸行為を演劇的出来事に見立てながら、読まれるべきテキストとしての家屋という視点を提示する [山口 1983, cf. 山口 1985a, b]。山口によれば、個人が世界を解釈する手がかりとして編まれた記号群としての文化 (テキスト) は、親族構造、村、家屋、経済、神話、踊り、儀礼神事といった多様な垂テキスト群から構成されており、個人は、これらの垂テキストを意識的、無意識的な行為を介し、身体の直接性を通して解釈する [山口 1983: 26-27, cf. 山口 1974]。家屋は、人間がそうした行為をおこなう場のひとつに他ならない。山口によれば、人間は、宇宙論的な劇中において演じる (家屋を読む) ことによって、自らのアイデンティティを支える枠組みを再確認する [山口 1983: 27]。

山口の視点では、家屋は住み手によって一方的に読まれる対象物にすぎない。これを、身体との相互作用

という点まで引き上げたのは、ハビトゥスの論理にもとづいてベルベル人の家屋について論じたブルデュである。ブルデュは、居住空間としての家屋を無意識的に読まれる書物にたとえ [Bourdieu 1977: 90; ブルデュ 1988: 123]、象徴的形態へとかたちを変えた諸関係を、人間は家屋に住むことによって暗黙のうちに読み取ることを指摘した。ブルデュは、身体の運動や移動などの「極度に微細な描写」と、象徴の諸体系の系統的な観察から、家屋の二項対立的な象徴が現実にもどのように習得され、使われるのかに目を向ける [Bourdieu 1973; ブルデュ 1990: 211-231]。ベルベル人の家屋空間は、男性の外側への動き／女性の内側への動き、乾／湿、上／下、光／闇、昼／夜、受精させる／受精するというような一連の諸対立の総体にしたがって組織されている。しかし、このような対立項は、家屋全体と世界の他の部分とのあいだにも確立されている。男性の公共的な場所である集会所やモスク、カフェ、畑、市場などに対するときには、家屋は女性の世界となる。家屋という内部世界から周囲の自然環境までを含めた外部世界の構造が、このようなかたちでベルベル人に馴化され、身体化されてゆく。家屋はハビトゥス⁸ 産出原理が客観化される特別な場所 [ブルデュ 1988: 123]、すなわちハビトゥスが具体的な行為となって表出する場所となり、人間の知覚や評価の基軸までもが人間と家屋とのこうした相互作用によって形成される [ibid.: 123-124, cf. 平井 1995; 1998: 21-22]。

最近ではムーアが、このようなブルデュの議論を受けて、マラケットの家屋空間について分析している [Moore 1994; 1996]。ムーアは、個人の実践によって生起する個々の文脈に沿って空間の意味作用が呼び起こされることを主張する [Moore 1994: 71-85; 1996: 201]。そして、こうした観点からマラケットの家屋空間を「テキスト (space as text, あるいは spatial text)」 [Moore 1996: 87] ととらえて解釈の対象とし、住み手による空間への能動的な働きかけ (戦略) を、空間と社会経済的な状況との動的な関係を視野に入れて論じた。

また、山口と同じくリオの家屋を分析した杉島は、異なる文脈で異なる人びとが多様な行為をおこなう「舞台装置 (set)」のように家屋をとらえる視点を提示し、家屋をミクロコスモスにたとえる視点を批判的に論じた [杉島 1988: 202-203, cf. 杉島 1986]。杉島は、家屋のシンボリズム (symbolism) は、現実には、住み手にとっても多様な解釈を許容する謎として存在しているが、それは家屋のシンボリズムが、住み手の行為との相互作用に依拠しているためであることを指摘する [杉島 1988: 209]。杉島の論点は、エレンにみられる文脈の多様性にあるのではなく、むしろ、家屋とその内部でおこなわれる行為とのあいだの相互作用にある。杉島は、「舞台装置」論によって、家屋のシンボリズムとさまざまな行為との相互作用により、家屋のシンボリズムに関する多様な解釈が生まれる可能性を指摘している [杉島 1988: 214]。

2) 集団としての家屋

家屋の意味作用に関する視点とは別に、社会における物質的、非物質的資産の継承に着目し、その権利と義務の主体となる集団としての家屋を分析する視点もある。レヴィ＝ストロースの「家社会 (house society, あるいは house-based society)」の議論であるが、近年では、それを踏まえて家屋に対する新たな視点が提示されてきた [Lévi-Strauss 1982: 173; Carsten and Hugh-Jones 1995: 6-21, cf. Lévi-Strauss 1987]。

レヴィ＝ストロースは、社会集団の特徴を分析するために、家屋をめぐる組織される集団、いわば社会単位としての「家」について論じる。クワキウトルに関する 1982 年の論考で、レヴィ＝ストロースは、ボアズの初期の研究では父系を指向すると考えられていたクワキウトルの集団が、現実には父系と母系の双方の側面をもつと考えられる点に着目した [Lévi-Strauss 1982: 164]。さらに、レヴィ＝ストロースは、クワキウトルに加えて、クローバーのユロックに関する研究の見直しや中世ヨーロッパの貴族階級の分析から、ある社会においては社会集団としての「家」が存在する可能性があることを指摘した。

レヴィ＝ストロースによれば、このような社会では、人間はときと場合にしながら「家」の保持する利益を最大に、損失を最小にするために、ふたつの異なる現象⁹ を同時に、戦略的に使用してきた [Lévi-Strauss 1982: 183-185]¹⁰。こうした観点から、レヴィ＝ストロースは、従来の人類学では相互に対立的、排他的と考えられてきた諸現象を再統合したり、超越したりするような社会制度の焦点として、「家」が存立することを指摘した。

「家」を中心に組織される社会、すなわち「家社会」では、必然的に「家」の保持する地位を明確化、類別化する資産が重要となる。それはまた、「家社会」であるかどうかを判別する指標のひとつである。「家」は、資産

をめぐる社会的な地位の差異化や富と権力をめぐる競争を、養取や縁組を駆使して繰り広げ、また場合によっては仮想的な親族関係を用いるなどの戦略を取って繰り広げる¹¹。

レヴィ＝ストロースの「家社会」の議論が事例を階層化された社会に限定しているのに対して、明確に階層化されていない社会でも、資産や権力、称号などの確保と継承という「家社会」の特徴がみられるとする視点もある [Waterson 1995: 51]¹²。たとえば、ウォータソンは、社会が階層化されているか平等的であるかどうかに関係なく、「家」が社会組織の焦点として重要な役割をになっている点を重視して、「家社会」概念をより広義に解釈していこうと試みている [Waterson 1995: 53, 55, 67]。

ウォータソン、カーステンとヒュー＝ジョーンズらは、こうした「家社会」の議論や象徴論的研究など、家屋を対象としたこれまでの人類学的研究を総括しながら、家屋をはじめとする建造物と人間との多様な関係の分析へと向かっている [e.g. Carsten 1987; Fox 1987; Fox 1993a, b; Fox (ed.) 1993; Carsten and Hugh-Jones (eds.) 1995; Carsten 1997; Joyce and Gillespie (eds.) 2000]。たとえば、カーステンとヒュー＝ジョーンズは、家屋の物理的、形式的な側面を取り上げ、建設過程や形式の変化などの家屋の動的な側面と、家族や世帯、親族などの社会集団の動的な側面との関係に注意を向けている [Carsten and Hugh-Jones 1995: 36-42; Carsten 1995; 1997, cf. Bloch 1995]。カーステンのランカウイの事例では、親は、子供の成婚時に家屋の増改築に着手することが多く、また、子供の結婚後の居住場所も頻繁に変わる [Carsten 1995: 107]。一方、子供の誕生や死亡で世帯が再編されたり、新たに世帯を興したりする場合、あるいは土地が売買されたりする場合などには、家屋は隣人や近親の男性たちによって、新たな立地場所へ持ち運ばれる [ibid.: 107-109]。家屋と集団はそれぞれに動的であり、その相互の関係もまた動的であることが示される。

ウォータソンらはまた、特定の「家」に霊的な力や資産が集約されること、精緻に飾られた家屋の外貌が住み手のアイデンティティや富、権力の表象として利用されること、家屋が神話的に正当化された権力や特権への追想を強く促す「紋章装置 (heraldic devices)」として働くことなど、社会のヒエラルキーの形成と維持、制度やイデオロギーを、「家」との関係で分析する視点を提示している [Carsten and Hugh-Jones 1995: 12]。

3) 表象の統合

近年の家屋研究におけるもうひとつの重要な視点は、家屋と文化的に構築された自然との関係である。集団としての「家」に関する議論と微妙に重なりながら、ウォータソンは、人間がどのように周囲の自然環境を含めた世界を理解し、家屋にもその理解を当てはめているのかを分析する。ウォータソンは、ある種の「生命力 (vital force)」や魂は生物のみが保持するのではなく、社会によっては家屋などの無生物も保持すると考えられ、それが家屋が「生きた実体」になる源泉となっていることを、東南アジアの島嶼部でみられる家屋の人格化、生物化の事例を多数提示しながら指摘する [Waterson 1990: 115-137, cf. ウォータソン 1997]¹³。家屋の「生命力」の源泉は多彩であり、自然の木の生命力や自然界の霊的な力の転化などと考えられ、その他に祖霊との関係でとらえることもできる。また、住み手にも影響力を及ぼすその「生命力」は、人間が家屋に住むことを通して再生産され続ける。「生きている家屋 (living house)」というイメージはまた、ときに人間の身体との相互的な隠喩関係としてとらえられ、家屋の各部に身体イメージが付与されることによって追認されてゆく [Waterson 1990: 129]¹⁴。さらに、家屋の人格化、生物化の最たる局面として、「生命力」を保持するようになった家屋にはなんらかのかたちで病気や死がおとずれる¹⁵。

東南アジアという地域に限られているけれども、ウォータソンは、これまでのところもっとも綿密かつ広範囲に家屋の意味を精査したといえる。その論述は、家屋そのものの物理的特徴とそこに住む人びとの活動だけではなく、心的特徴、すなわち人びとの心の様式への理解がなければ家屋を理解することができないことを端的に示している。家屋は、物理的構造と住み手の心性が結合した実体として立ちあらわれているといえるだろう。近年、スパークスらは、「家社会」概念の再検討とともに家屋のこの側面を対象化しようと試みている [Sparkes and Howell: 2003]。そこで扱われるのは、物理的構造と人間の心性が結びついて組織された「house」という概念である。ある社会において、人間の居住空間として立ちあらわれる「house」なるものが、どのような意味作用をもつのかは千差万別である。スパークスらは、そうした個別の社会において、「house」が日常性やモラリティの形成にどのように関与するのか、また、それが社会経済的変容の渦中でどのように変化するのかを議論して

いる。スパークスらの議論は、建築を対象とした研究に新たな視点を加えたといっただろう

3. 家屋の本性

「構造化された空間」の議論から出発した家屋の意味作用に関する分析視点は、最近になって統合されるよりもむしろ分散している。それは、人間と家屋のかかわりが本質的に多様であり、家屋が発する（家屋が帯びる）意味も決して一元化されないことを端的にあらわしているといえるだろう。このように認識したうえで、以下では、ラオスでの家屋研究における留意点を述べておく。

象徴論的研究に代表される従来の家屋研究では、分析者の目の前に投げ出された家屋は、「文化」の全体像を現実の生活の中で反映させた鏡像としてとらえられていた。分析者は、その家屋をモデル化し、そこから「文化」の全体像へ接近することが可能になると考えられていた。そうした家屋の意味作用の分析は、文化的装置としての家屋の重要性をあきらかにした。しかし、同時に、家屋の背後には、変化しない「文化」の総体があらかじめ想定されていたことは否定できない。それゆえに、そうした分析では、住み手を取り巻く現実の社会変化や個々の住み手の多様で複雑な行為、あるいは家屋が変化したとき、家屋の形式や意味がどのように解釈されるのかという問題をとらえる視点が捨象されてきた。家屋研究の出発点として、まずこの点に留意する必要がある。

家屋の意味作用の扱いにおいては、だれがそれを解釈するのかが問われた。この問題は、他者表象や異文化理解という近年の人類学の議論とも関連する。しかし、この姿勢を突き詰めれば、家屋の解釈は不可能になり、分析者が家屋をどのように理解したかを他者に伝えることもまた不可能になる。よって、方法的・認識論的な意義と重要性を認めつつも、ラオスの調査では、この点について深く省察することはしない。それよりもむしろ、家屋のもつ意味を住み手自身がどのように解釈するのか、また、その意味がどのように第三者に伝えられるのかということのほうに重点を置くことにしたい。分析者が家屋を解釈することとは別に¹⁶、住み手もまた、目の前に投げ出されている家屋を解釈する。この視点を保持しなければ、現実フィールドで起こっている家屋の変化をとらえることはできない。家屋が変化する局面を人びとはどのように解釈しているかが重要な課題になる。

「家社会」の議論では、家屋をめぐる組織される集団間の関係をとらえる新たな視点が提示された。それは、家屋の意味作用が中心的に議論されてきた建築の研究において、集団の様態、人びとの諸活動を家屋と結びつけたという点で大きな意味をもっていた。しかし、「家社会」の議論では、枠組みとしての家屋とそこに生きる住み手の双方が存在することが前提とされ、住み手と家屋との対応関係も静態的に想定されてきたことは否定できない。ここに象徴論が陥ったのと同じ問題がある。

一方、最近の研究では、必ずしも十分に扱われてこなかった家屋の形式上の特徴と家屋の動的な側面に着目する傾向がみられる¹⁷。それらの研究では、家屋が形式を変えゆく過程を対象化する。あるいは、ウォータソンに顕著なように、家屋を生きた実体ととらえたうえで、家屋形式の変化の過程と社会集団や住み手の変化の過程の相互関連性を分析するところに特徴がある。

家屋研究は、家屋と住み手とのこのような複合的で相互的な関係を視野に入れる必要があるだろう。両者のそうした関係において、家屋の住み手がどのように決まってくるのか、住み手が家屋の形式をどのような理由で変えるのか、住み手との関係で家屋の形式がどのように決められるのかという側面をとらえていくことが肝要になる。ここから、人びとと家屋との相互構築のモデルを示していくことが可能になるだろう。モノ班における調査・研究では、本稿で整理したアプローチの方法とその限界を踏まえながら、家屋と住み手の両者およびそれらの背後にある「文化」や社会との対応関係を無前提に想定しないで、家屋を扱うことに留意したい。

この項の最後に、モノとしての家屋に対する筆者の立場をあきらかにしておきたい。山口やブルデュらがいうように、家屋がアイデンティティを確認する枠組みや諸関係を習得する場になることも含めて、住み手がなんらかの意味を意識的、無意識的に家屋から読むことが可能なのは、家屋が形式（空間の組織や構法）をもつからである。そうした特徴があるからこそ、家屋は解釈を越えて、あるいは解釈の影響を受けながらも、繰り返して伝えたり、変化していくことが可能になる。いわば、物質としての家屋に対するこうした視点が、人びとの創造の場としての家屋を提示することにつながると筆者は考える。

4. ラオスにおける調査について

これまで筆者は、おもにタイの山地社会において研究をおこなってきた。モノ班における調査でも、ラオスの山地社会をおもな研究対象とする予定である。とくに、タイにおける調査との関連から、アカをはじめとする漢・チベット語のチベット・ビルマ語派口語群に属する集団のあいだで現地調査をおこないたい。具体的な調査地は、今年度におこなう予定の予備調査において選定するが、おおまかな目安としては、ラオス北部のルアン・パバーンやポンサリ周辺の山地を考えている。調査期間は現地の情勢や秋道プロジェクトとモノ班全体の動向とのバランスを考慮しなければならないが、家屋や空間の実測をとまなう調査の性格上、ひとつの村落に一月間ほどの滞在を数度繰り返すというかたちを考えている。

1) 先行研究

ラオスにおいては、筆者がタイで継続しておこなってきた漢・チベット語系の集団を含めた山地社会を対象とした民族誌的、人類学的研究の数は限られている。無論、かなり以前からいくつかの集団の存在は報告されたり概要が述べられたりしてきたが、近年になってようやく比較的詳しい情報が公にされるようになった [Chazée 1999; Schliesinger 2003; Mansfield 2000]。

一方、建築や居住文化に関する研究も多くはない。ラオ系の人びとの家屋に関してはクレマンをはじめとするいくつかの研究があるが [Clement 1982; Charpentier 1982; Charpentier, S. and P. Clement; 川本他 2004]¹⁸、山地社会の家屋についての研究は報告的な内容のもの以外みられないというのが現状である¹⁹。

こうした点から、ラオスの山地社会をおもな対象とし、人類学的・建築学的観点から論じる余地は多分にあるといえるだろう。

2) ターゲット

つぎに、ラオスにおいて家屋を中心とする建築を研究対象とするうえで、先に述べた先行研究の流れと現在までの到達点を踏まえて、いくつかの調査目標を設定しておく。しかし、その前に、モノ班としておこなうラオス調査における当面の問題設定、モノ調査の可能性について述べておく。

(1) モノ調査の行方

本稿の前半で述べたような、いわゆる「伝統社会」における建築調査の目的は、建築を通して当該社会とその背景にある「文化」を理解すること、換言すれば、その社会に生きる人びとを理解することにある。こうした問題意識は、象徴論的建築研究の展開に目を向ければたちどころに知ることができる。単線的な理解は困難であること、還元主義の落とし穴があることを踏まえつつもあえて述べれば、家屋は個人と「宇宙」をつなぐ媒介項であるからこそ、家屋を調査することで個人と社会の双方を理解することができると考えられたわけである。ただし、その前提として、なにかしら集合表象的な意識—単一の集団イメージや一枚岩的な「文化」イメージとしてあらわれる—が、その社会に生きる人びとに、多くの場合無意識的に共有されていなければならない。

ところで、こうした考えとそれにもとづく調査方法は、現代社会においてほとんど意味をもたない。それは、我々が生きる現実、すなわち日本の都市における居住の様態を想起してみれば容易に想像できる。日本の都市においていくら家屋を調べてみても、そこからは集団化の論理、たとえば地縁集団や血縁集団の特徴をあきらかにすることは困難であるし、現代の「日本人」に共有された集合意識を知ることができない。むしろ、同じようなつくりの家屋や部屋であるにもかかわらず、その内部に組織される集団やそこに生きるひとりひとりの多様性が強調されることになるだろう。

方法論上のこうした問題と現代の都市居住の特徴を踏まえて、人類学的方法論をベースにした最近の建築研究ではモノに着目するようになった。家屋の中にあるモノ、空間を占めるモノから、そこに生きる人びとを理解し、ひいては現代社会の多様な生き方や価値観、つまり人間の多様性を理解しようとするわけである [cf. INAX ギャラリー企画委員会 2002]²⁰。

筆者がラオスにおいて展開しようとするのは、建築研究とからめたモノ研究であるから、この点について吟味しておく必要があるだろう。つまり、このようなモノ研究の視点が、ラオスの山地社会において適用できるだろ

うかという問題である。

「伝統社会」における建築研究を通過して、現代の建築研究はモノ研究に到達した。その前提になるのは、一枚岩的な「文化」や均質な社会のイメージではなく多様性であり、「伝統社会」の建築研究とは対極にある考え方である。人びとの価値観も生き方もさまざまに分かれ、すでにその全体像を想起することが不可能に近い現代社会である。即断は避けなければならないが、ラオスの山地社会は当然のことながら「伝統社会」に近いことが予想される。ここに、ラオスの山地社会において建築研究との関連からモノ研究をおこなうために、乗り越えなければならない壁があるわけである。

そのためのひとつの方法として、「伝統社会」と「現代社会」という分類自体をカッコに入れるということが考えられる。もちろん、これらを検討するにはラオスの調査を経験しなければならないというジレンマがあるが、ここではそれを承知で筆者の現在の考えを述べておきたい。

幸いにして筆者は過去に、建築を切り口としたタイでの調査において、この問題に関して検討したことがある。一枚岩的な「文化」をもつようにみえる—それゆえに表面的には同じ形式の家屋をもつようにみえる—集団の内部においても、家屋についての考え方や解釈の仕方が多様であることや、集団内では決して同じ家屋とは考えられていないことを北タイのアカの事例から示したものである〔清水 2001〕²¹。北タイのアカの家屋は、物質としてはきわめて簡素でほとんど同じつくりのようにみえるが、意味の側面から考えるとじつに多様である。さらに、アカが自分や他のアカの家屋をどのように考えているかを知れば、家屋をさまざまに分類することが可能であることがわかる。家屋は、祖先との紐帯をどれほど強く保っているのかをあらわす指標になる。アカの社会は政治的な側面からこれまで平等主義的で静態的と考えられてきたが、家屋に対する人びとの考えは、そのようなイメージに疑問を投げかけるものである。家屋の細部に対するこだわりやつくりへの美的な執着は一様ではないし、だれの家屋がきれいでだれの家屋はきたないとか、どの人の家屋は客をもてなすに値するといったように、個人や集団に関するある種の社会的評価を家屋と結びつける例は多様にある。我々がそうであるのとまったく同様に、人びとは家屋を通して自身に関するなにごとかを表明しようとするのが可能なのだし、自身を取り巻く社会経済的、政治的状況を表明するのに家屋はじつに便利なものなのである。

また、別稿で述べたこととも関連するが〔清水 2004〕、山地社会がこれまでにたどってきた歴史や人びとが体験したこと—戦争、越境、移住、国家との関係など—を考慮すると、たとえひとつの村落に住む集団でも、その内部においては多様な価値観や生き方が生起している可能性は十分にある。ここから、ラオスの山地社会を「伝統社会」ととらえること自体をカッコにくくることができるのではないだろうか。現在のところは、暫定的ながらもこのような考えのもとに、山地社会でのモノ研究を進めていきたい。以下に具体的な調査の構想について述べる。

(2) 家屋を含めた居住空間全般の把握

モノ班のラオス調査においては、家屋、屋敷、村落およびその周囲の自然環境、畑地など、人びとの日常生活が組織される場としての居住空間全般の把握が最初の調査事項とする。具体的には、これら居住空間がどのように組織されているのかを、俯瞰的にあきらかにすることが最初の手続きとなる。そのうえで、各空間において人びとがどのような活動をしているのかを民族誌的に落とし込んでいくという流れになるだろう。

とくに調査の中心的な対象となる家屋については、空間の組織、構法（構造と工法）、部材に使われる樹種、木材の加工法といった物質としての特性の把握に加えて、空間の使用法、家屋をめぐる組織される集団の様態、家屋を舞台にしておこなわれる儀礼的行為などをあきらかにしていく。

(3) モノ調査：モノに刻まれた記憶、経験、歴史

上記(2)は、いわば、建築を対象とした調査の最初の手続きである。そこからの展開として、モノとからめた調査を進めたい。そのさいの視点はふたつある。ひとつは、個人の日常を組織している時空間を家屋内外に存在するモノから再構築すること、もうひとつは個人の生きてきた歴史をモノの存在からあきらかにすることである。

前者は、モノそのものを対象にするというよりも、(2)においてあきらかにした居住空間の俯瞰図に、モノ

を配置したりそのモノをめぐる人びとの行為を記述したりすることが目的である。そして、人びとの生活世界が時間的、空間的に分節されるときにどのようなモノがいかなるかたちで関係するのかをあきらかにしていきたい。

後者は、あるひとりの個人を取り巻くモノ世界全般が対象になる。あるモノの来歴を詳細に聞き取ったり、そのモノに込められた意識やそのモノをめぐる個人はどのような経験をしてきたかを調べたりする。これによって、個人のライフ・ヒストリーをモノから構成すること、人びとの生き方や価値観の多様性をあきらかにすることを旨とするものである。

そのための対象となる具体的なモノに関しては、現地調査を経ていない現在、詳しく述べることはできないのが実情である。考えられることとしては、儀礼的なモノ—さまざまな儀礼において使われるモノを含む—があるが、それに加えて、日常生活において使われるモノも幅広く対象とし、調査していく必要があるだろう。儀礼的なモノは、個人の人生の節目におこなわれた儀礼のようなイベントに使われるので、時空間の記憶と結びつきやすい。また、個人がたどってきた人生において印象づけられた人への追想や過去への憧憬を強く促すものとなる。しかし、個人の生活世界においては、日常なにげなく使われているモノの中にも、個人の生きてきた歴史と強く結びつくものがあるはずである。そうしたモノについて、だれからどのように入手したのか、その個人にとってどのような点でそのモノが価値をもっているのかを探っていくことになる。

そして、このような調査から、山地社会におけるモノ研究の可能性を広げるとともに、静態的で変化に乏しく、均質な「伝統社会」という見方や前提そのものを再考する契機を得たいと考えている。

Summary: This paper firstly aims to make brief theoretical and historical review of the study on Architecture, especially on the houses in Mainland Southeast Asian societies and shows arrival points of the study until the present. Following that part, possibility of the study on things in context of architectural study is considered toward the field research in Lao P.D.R. in the near future. The points at issue in the review part are as follows;

1. Meanings of the house
2. The house as group
3. Symbolism and Nature

引用文献

浅川滋男

1994 『住まいの民族建築学—江南漢族と華南少数民族の住居論—』 建築資料研究所。

Barnes, R. H.

1974 *Kédang: A Study of the Collective Thought of an Eastern Indonesian People*, Oxford: Clarendon Press.

Bloch, M.

1995 *The Resurrection of the House amongst the Zafimaniry of Madagascar*, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 69-83.

Bourdieu, P.

1973 *The Berber House*, in M. Douglas (ed.), *Rules and Meanings: The Anthropology of Everyday Knowledge*, Harmondsworth: Penguin Education, pp. 98-110.

1977 *Outline of a Theory of Practice*, R. Nice (trans.), Cambridge: Cambridge University Press.

ブルデュ, P.

1988 『実践感覚1』 今村他訳 みすず書房。

1990 『実践感覚2』 今村他訳 みすず書房。

Carsten, J. and S. Hugh-Jones (eds.)

1995 *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.

Carsten, J. and S. Hugh-Jones

1995 *Introduction: About the House-Levi-Strauss and Beyond*, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About*

the House: Lévi-Strauss and Beyond, Cambridge: Cambridge University Press.

Carsten, J.

1987 Analogous or Opposites: Household and Community in Pulau Langkawi, Malaysia, in C. Macdonald (ed.), *De la hutte au palais: sociétés <<à maison >> en Asie du Sud-Est insulaire*, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 153-168.

1995 House in Langkawi: Stable Structure or Mobile Homes? in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 105-128.

1997 *The Heat of the Hearth: The Process of Kinship in a Malay Fishing Community*, Oxford: Clarendon Press.

Charpentier, S.

1982 *The Lao House: Vientiane and Luang Prabang*, in Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.), *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press, 49-61.

Charpentier, S. and P. Clement

1990 *L' Habitation Lao dans les regions de Vientiane et de Louang Prabang Vol.1*, Paris: Peters Press.

Chazée, L.

1999 *The Peoples of Laos: Rural and Ethnic Diversities*, Bangkok: White Lotus.

Clement, P.

1982 *The Spatial Organization of the Lao House*, in Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.), *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press, 62-70.

Cunningham, C. E.

1973 *Order in the Atoni House*, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, University of Chicago Press, pp. 204-238. [1964 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 120: 34-68]

P. E. デ=ヨセリン=デ=ヨング他

1987 『オランダ構造人類学』宮崎恒二他編訳 せりか書房。

デュルケーム, E.

1980 『分類の未開形態』小関藤一郎訳 法政大学出版社。

Ellen, R.

1986 *Microcosm, Macrocosm and the Nuaulu House: Concerning the Reductionist Fallacy as Applied to Metaphorical Levels*, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 142(1): 1-30.

遠藤央

1986 「<イエ>概念の可能性—東インドネシアの事例を手がかりとして—」『社会人類学年報』12: 55-85。

Feldman, J. A.

1977 *The Architecture of Nias, Indonesia with Special Reference to Bawömataluo Village*, Columbia University Ph.D. Thesis.

1979 *The House as World in Bawömatalua, South Nias*, in E. M. Bruner and J. O. Becker (eds.), *Art, Ritual and Society in Indonesia*, Ohio: Ohio University Center for International Studies, pp. 127-189.

Forth, G. L .

1981 *Rindi: An Ethnographic Study of a Traditional Domain in Eastern Sumba*, The Hague, Martinus Nijhoff.

Fox, J. J. (ed.)

1993 *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study.

Fox, J. J.

1973 *On Bad Death and the Left Hand: A Study of Rotinese Symbolic Inversions*, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 342-368.

- 1987 The House as a Type of Social Organization on the Island of Roti, in C. Macdonald (ed.), *De la hutte au palais: sociétés <<à maison >> en Asie du Sud-Est insulaire*, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 171-178.
- 1993a Comparative Perspective on Austronesian Houses: An Introductory Essay, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 1-29.
- 1993b Memories of Ridge-Poles and Cross-Beams: The Categorical Foundations of a Rotinese Cultural Design, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 140-179.
- 平井京之介
- 1995 「家を化粧する：北部タイの女性工場労働者と消費」『民族学研究』59(4): 366-387。
- 1998 「発展する家」佐藤浩司編『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』学芸出版社, pp. 9-26。
- Hobart, M.
- 1978 The Path of the Soul: The Legitimacy of Nature in Balinese Conceptions of Space, in G. B. MILNER (ed.), *Natural Symbols in South East Asia*, University of London: School of Oriental and African Studies, pp. 5-28.
- Howe, L.
- 1983 An Introduction to the Cultural Study of Traditional Balinese Architecture, *Archipel* 25: 137-158.
- Hugh-Jones, C.
- 1979 *From the Milk River: Spatial and Temporal Processes in Northwest Amazonia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hugh-Jones, S.
- 1979 *The Palm and the Pleiades: Initiation and Cosmology in Northwest Amazonia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1985 *The Maloca: A World in a House*, in E. Carmichael et al., *The Hidden Peoples of the Amazon*, London: Museum of Mankind, pp. 78-93.
- 1995 Inside-Out and Back-to-Front: The Androgynous House in Northwest Amazonia, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 226-252.
- Humphrey, C.
- 1988 No Place like Home in Anthropology: The Neglect of Architecture, *Anthropology Today* 4(1): 16-18.
- INAX ギャラリー企画委員会
- 2002 『普通的生活—2002年ソウルスタイルその後 李さん一家の3200点—』INAX 出版。
- 板橋作美
- 1989 「象徴論的解釈の危険性あるいは恣意性」吉田禎吾編『異文化の解説』平河出版社, pp. 3-53。
- Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.)
- 1982 *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press.
- Joyce, R. A and S. D. Gillespie (eds.)
- 2000 *Beyond Kinship: Social and Material Reproduction in House Societies*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 鏡味治也
- 1987 「宇宙と調和する住まい」『季刊民族学』42: 63-71。
- 1994 「バリ島の住居と世界観」『環中国海の民俗と文化第4巻 風水論集』凱風社, pp. 400-424。

Kana, N. L.

- 1980 The Order and Significance of the Savunese House, in J. J. Fox (ed.), *The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia*, Cambridge: Harvard University Press, pp. 221-230.

河本順子・シツテイワン ソムチット・吉田勝行

- 2004 「ラオス中部における農山村住宅の形態変遷」『日本建築学会計画系論文集』577: 89-96。

栗原伸治

- 1998 『建築と文化・社会との相互作用—中国黄土高原の窑洞住居・集落を対象として—』総合研究大学院大学平成10年度学位論文。

Lea, V.

- 1995 The House of the Mebengokre (Kayapo) of Central Brazil-A New Door to Their Social Organization, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 206-225.

リーチ, E.

- 1976 「言語の人類学的側面—動物のカテゴリーと侮蔑語について—」諏訪部仁訳『現代思想』4(3): 68-90。
1981 『文化とコミュニケーション—構造人類学入門—』青木・宮坂訳 紀伊国屋書店。
1991 『社会人類学案内』長島信弘訳 岩波書店。

Lévi-Strauss, C.

- 1982 The Social Organization of the Kwakiutl, in S. Modelski (trans.), *The Way of the Masks*, Seattle: University of Washington Press, pp. 163-187.
1987 Clan, Lineage, House, in S. Willis (trans.), *Anthropology and Myth: Lectures 1951-1982*, Basil Blackwell, pp. 151-194.

レヴィ=ストロース, C.

- 1977a 『悲しき熱帯』(上) 川田順三訳 中央公論社。
1977b 『悲しき熱帯』(下) 川田順三訳 中央公論社。

Mansfield, S.

- 2000 *Lao Hill Tribes: Traditions and Patterns of Existence*, New York: Oxford University Press.

宮崎恒二

- 1980 「オランダ構造主義と分類体系研究」『民族学研究』45(1): 52-59。

Moore, H. L.

- 1994 *A Passion for Difference: Essays in Anthropology and Gender*, Cambridge: Polity Press.
1996 *Space, Text, and Gender: An Anthropological Study of the Marakwet of Kenya*, New York: The Guilford Press.

村武精一

- 1984 『祭司空間の構造—社会人類学ノート—』東京大学出版会。

長島信弘

- 1972 「〈脱穀場を清掃する〉儀礼—ウガンダ、北部テソ社会におけるエタレ儀礼—」『季刊人類学』3(4): 38-97。
1974 「住居の象徴性—パラ=ナイル語四社会の比較—」『アフリカの文化と言語』月刊言語別冊1: 50-67。
1977 「遠似値への接近—右と左の象徴的分類に関するニーダムの所論をめぐって—」『一橋論叢』77(3): 315-323。

Needham, R.

- 1958 A Structural Analysis of Purum Society, in *American Anthropologist* 60: 75-101.
1973 Introduction, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, Chicago: University of Chicago Press, pp.xi-xxxix.

Needham, R. (ed.)

- 1973 Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification, Chicago: University of Chicago Press.
- ニーダム, R.
1977 『構造と感情』 三上暁子訳 弘文堂。
1993 『象徴的分類』 吉田・白川訳 みすず書房。
- ラボポート, A.
1987 『住まいと文化』 山本他訳 大明堂。
- ルドフスキー, B.
1984 『建築家なしの建築』 渡辺武信訳 鹿島出版会。
- 佐藤浩司編
1998 『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』 学芸出版社。
- 佐藤浩司
1989a 「民族建築学／人類学的建築学」(上)『建築史学』12: 106-132。
1989b 「民族建築学／人類学的建築学」(下)『建築史学』13: 93-115。
1990 「始原の小屋 (primitive hut) の発見—民族建築学の射程—」『民博通信』49: 35-62。
2004 「家の中の物から見えてくるもの—<2002年ソウルスタイル>展から—」野島・原田編著『<家の中>を認知科学する—変わる家族・モノ・学び・技術—』新曜社, pp.////。
- Schliesinger, J.
2003 Ethnic Groups of Laos Vol.4: Profiles of Sino-Tibetan- Speaking Peoples, Bangkok: White Lotus Press.
- 関根康正
1979 「ロングハウスをめぐる空間構造：イバン族の場合」『季刊人類学』10(2): 54-107。
1995 『ケガレの人類学—南インド・ハリジャンの生活世界—』東京大学出版会。
1997 「境界に立つ<住まい>—ケガレの創造力—」小西正捷編『アジア読本・インド』河出書房新社, pp. 113-122。
1998 「他者と対面する住まい」佐藤浩司編『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』学芸出版社, pp. 229-248。
- 清水昭俊
1979 「家」『ふおるく叢書9 仲間』弘文堂, pp. 13-97。
1987 「日本の家の文化的構成」清水昭俊著『家・身体・社会—家族の社会人類学—』弘文堂, pp. 201-221。
1989 「序説—家族の自然と文化」清水昭俊編『家族の自然と文化』弘文堂, pp. 9-60。
- 清水郁郎
2001 『北タイ・アカの家屋に関する研究—家屋の形式とその変化への視点から—』総合研究大学院大学学位請求論文。
2004 「東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性—<モノと情報>班ワーキング・セミナーの活動を通して」『秋道プロジェクト全体報告書』総合地球環境学研究所。
- Sparks, S. and S. Howell(ed.)
2003 The House in Southeast Asia: A Changing Social, Economic and Political Domain, London: Routledge Curzon.
- スペルベル, D.
1979 『象徴表現とはなにか』菅野盾樹訳 紀伊国屋書店。
- 杉本尚次
1987 『住まいのエスノロジー』住まいの図書館出版局。
- 杉島敬志
1986 「フローレス島・リオ族・リセ地域における伝統家屋の建築構造」『物質文化』47: 60-79。
1988 「舞台装置としての家屋—東インドネシアにおける家屋のシンボリズムに関する一考察—」『国立民族学博物館研究報告』13(2): 183-220。

- 1990 「リオ族における農耕儀礼の記述と解釈」『国立民族学博物館研究報告』15(3): 573-846。
1997 「承認と解釈—プラクティスとしての儀礼と社会のかかわり—」『岩波講座文化人類学9 儀礼とパフォーマンス』岩波書店, pp. 241-268。

Suzuki, P. T.

- 1984 The Limitations of Structuralism, and Autochthonous Principles for Urban Planning and Design in Indonesia: The Case of Nias, in *Anthropos* 79: 47-53.

Tambiah, S. J.

- 1973 Classification of Animals in Thailand, in M. Douglas (ed.), *Rules & Meanings: The Anthropology of Everyday Knowledge*, Harmondsworth: Penguin Education, pp. 127-166. [1969 *Animals are Good to Think and Good to Prohibit*, *Ethnology* 8(4): 424-459.]

豊田信幸

- 1982 「タイ北部山地民の家屋とその構造—ヤオ族とアカ族の事例—」『リトルワールド研究報告』6: 23-66。

Traube, E.

- 1986 *Cosmology and Social Life: Ritual Exchange among the Mambai of East Timor*, Chicago: University of Chicago Press.

Turton, A.

- 1978 Architectural and Political Space in Thailand, in G. B. MILNER (ed.), *Natural Symbols in South East Asia*, University of London: School of Oriental and African Studies, pp. 113-132.

若林弘子

- 1986 『高床式建物の源流』弘文堂。

Waterson, R.

- 1990 *The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia*, Oxford: Oxford University Press.
1993 Houses and the Built Environment in Island South-East Asia: Tracing Some Shared Themes in the Uses of Space, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 221-235.
1995 Houses and Hierarchies in Southeast Asia, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 47-68.

山口昌男

- 1974 「家屋と世界観—アフリカの円環的世界—」『アフリカの文化と言語』月刊言語別冊 1: 44-49。
1983 「家屋を読む—リオ族（インドネシア・フローレス島）の社会構造と宇宙観—」『社会人類学年報』9: 1-28。
1985a 「ひとの棲処—インドネシア・フローレス島リオ族の場合（1）—」『國學院大學日本文化研究所報』123: 1-8。
1985b 「ひとの棲処—インドネシア・フローレス島リオ族の場合（2）—」『國學院大學日本文化研究所報』124: 2-7。

吉田禎吾編

- 1989 『異文化の解読』平川出版社。

吉田禎吾

- 1983 「象徴的分類と比較研究—ロドニー・ニーダムの所論をめぐって—」『宗教と世界観—文化人類学的考察—』九州大学出版会, pp. 251-264。
1984 『宗教人類学』東京大学出版会。

注

¹ ある社会の建築を対象とした調査・研究は幅広く、たとえば建築学や地理学、あるいは環境との関わりにおい

て家屋を分析する研究も数多い。それらのすべてをここで俎上にあげることにはできないが、いくつかの例をあげるとすれば、それらの研究には、起源論や形態の比較研究 [e.g. 杉本 1987]、形態の特徴を環境や気候条件の側面から分析する研究 [e.g. ラポポート 1987] などがある。

² 例外として、たとえばコロンビアのバラサナにおける神話的事象や儀礼と構造化された時空間の関係を分析するヒュー＝ジョーンズらの研究 [e.g. Hugh-Jones, C. 1979; Hugh-Jones, S. 1979; 1985; 1995]、ケニアのマラクエットにおけるムーアの家屋空間の研究 [Moore 1996]、ランカウィにおける家屋と集団の相互関係を分析するカーステンの研究 [Carsten 1997] などがある。建築学と人類学または民族学の境界領域では、民族建築学を標榜して、おもに中国の少数民族の建築を対象とする浅川の研究 [浅川 1994]、黄土高原の建築を社会的、文化的な側面から分析する栗原の研究などがある [栗原 1998]。

³ 1980年代後半までの建築を対象にした研究の学説史的な整理は、佐藤が詳細におこなっている [佐藤 1989a, b]。

⁴ オランダの構造人類学者は、インドネシアの空間分類、すなわち空間構造と社会構造に共通する原理の解明を、すでに1920年代から問題にしていた [佐藤 1989a: 119, cf. 宮崎 1980; P. E. デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング他 1987]。

⁵ 象徴分析をおこないながら、その導かれる点がまったく異なる家屋の研究として、タートンの論考は特筆されるべきだろう。タートンは、ローカルな文脈と考えられてきた家屋の建築儀礼の分析から、より強大な外部の政治構造の影響がうかがえることを、北タイの事例から示した [Turton 1978]。

⁶ ここでいう象徴とは、リーチの定義するような性格をもつ事象ととらえておく [リーチ 1981]。リーチは、「AがBをあらわし、かつ、AとBとの関係に本質的でぬきざしならぬ絆がない場合、つまり、異なる文化的脈絡にAとBが属する場合」に標号が象徴になるという [ibid.: 34]。標号とは、それが意味するものとの連合が文化的約束事にもとづくものと定義される [ibid.: 30]。

⁷ ヤップ島の家屋に関する象徴論的分析を検証した板橋は、構造的な分析から整合化された図式を描出する方法論としての象徴論的解釈そのものへの懐疑を、一層明確に表明している [板橋 1989]。

⁸ ハビトゥスは、「規則に適った即興」 [ブルデュ 1988: 91]、すなわち、「客観的に『調整を受け』 (régulé)、『規則的で』 (régulier) ありうるが、いかなる点でも規則 (règle) への従属の産物ではない」実践が生まれる母胎である [ibid.: 84]。また、「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurées)」とも定義される [ibid.: 83]。

⁹ たとえば父系出自 (patrilineal descent) と母系出自 (matrilineal descent)、親子関係 (filiation) と居住 (residence)、ハイパガミー (hypergamy) とハイポガミー (hypogamy)、系譜的な近親者との結婚 (close marriage) や地理的に遠距離にある者との結婚 (distant marriage)、世襲される権利 (heredity) と選挙によって与えられる権利 (election) などといったものがあげられる [Lévi-Strauss 1982: 184]。

¹⁰ このような「家社会」の特徴を、遠藤はつぎのように端的に表現する [遠藤 1986]。「つまり、基本的な社会単位として<イエ>という枠組みが設定され、つぎにそこへヒトを補充する規則を考える… (中略) …その規則は「出自」以外ののものであっても不都合はないはずである」 [遠藤 1986: 57]。

¹¹ レヴィ＝ストロースの「家社会」概念の特徴は、そうした社会が親族が基盤となる平等的社会 (基本構造) と社会的地位が基盤となる階層的な社会 (複合構造) 双方の特質を併せ持つ、複合的で過渡的な状態にあるという点にも認められる [Fox 1993b: 7; Carsten and Hugh-Jones 1995: 9-10, cf. Lévi-Strauss 1987]。

¹² この点に関してウォータソンは、「高度に平等主義的 (highly egalitarian)」なロングハウスをもつボルネオのイバンやブラジルのカヤボなどの例を指摘している [Waterson 1995: 51, cf. Waterson 1990: 140; Lea 1995]。

¹³ ウォータソンは、サクッディの村でシェフォールドが遭遇したつぎのようなフィールド体験を取り上げて、「生命力」を保持する家屋について述べる [Waterson 1990: 117]。村に到着した後、シェフォールドはロングハウスを訪れる。彼はそこでスケッチと実測をして過ごすのが、数日後にマラリアにかかる。それは、ロングハウスが彼にもたらしたものだ。「私 (シェフォールド) の探検はマラリアの暴力的な攻撃によって終わった。村人は、この攻撃は私が過度に驚嘆したことへの家屋からの反応であると説明した。私が家屋をあれほど賞賛し、触れ、

実測したことで、家屋に影響を与えて邪魔をしてしまった。家屋は結果的に私を怪しみ、いらいらをつのらせた。そしてついに私に力を集中して私を病気にした。感情を害された家屋を鎮めるための儀礼がおこなわれた」[ibid.]。

¹⁴ 家屋などの建造物では、人間の身体イメージとの象徴的な関係が顕著である [cf. Hobart 1978; Howe 1983]。たとえば、バリ人の家屋では、男性の世帯主の人体各部の寸法が家屋の寸法や屋敷の配置寸法の指標となる [鏡味 1994]。また、バリ人の考えでは、家屋は人間のように頭（家族の聖廟）をもち、さらに腕（寝所と談話用の小屋）、へそ（中庭）、生殖器（門）、脚（台所と穀倉）、肛門（ごみを捨てるための後庭の穴）をもつ [Waterson 1990: 130, cf. Kana 1980]。

¹⁵ ウォータソンは、トラジャにおいて、火災によって家屋に死がもたらされた場面を記述している。全村 24 戸のうち 14 戸を焼いたその火災では、2 戸の貴族階級の家屋が焼失した。被災者はそこで水牛を供儀したが、その儀礼は焼けた家屋の葬式であるという [Waterson 1990: 135]。家屋の生死の局面だけでなく、ウォータソンが提示する東南アジアの事例では、家屋と住み手それぞれの健康状態が密接な関係にあることが示される [ibid.: 132-135]。たとえば、ボルネオのイバンのあいだでは、人間の健康状態を表現する言葉がロングハウスにも適用される。ロングハウスが健康な状態は「冷たい」とされ、悪霊のたぐいや住み手をも脅かす伝染性の病気にさらされるような場合には「熱を出す」と表現される [ibid.: 135]。

¹⁶ 佐藤は、「住居じしんの文化的な重要さは、言葉による理解が限界を有するにもかかわらず、住居が意味作用をもつ体系として我々の手のとどくところに実在し、再生産されているという事実のほうにもとめるべきだとおもわれる」と述べて [佐藤 1989b: 98]、家屋がもつ意味を分析することの意義を表明しているが、本稿も同じところに意義を認める。

¹⁷ 前掲書 [Carsten and Hugh-Jones 1995; Carsten 1995; 1997; Bloch 1995]。

¹⁸ クレマンらは、ヴィエンチャンとルアン・パバーン周辺のアオ人の家屋について、その空間の組織や方位観について詳細に報告している [ibid.]。

¹⁹ チャズイーは、ラオス全域の諸集団の文化的、社会的特徴を網羅したその著書の中で、言語グループごとの家屋について、その特徴を述べている [Chazée 1999]。

²⁰ モノ研究と呼べる分野は、かつても現在も建築研究に関連してある。その代表的な例は CDI（商品科学研究所）がおこなった生活財調査である [商品科学研究所 1980]。しかし、ここで明確にしておかなければならないのは、前記のような問題意識を持つに至った人類学的フィールドワークからの建築研究とそうした研究におけるモノへの視点、およびそこから展開は大きく異なることである。CDI では、住居形態と家族構成、年収などの似通った家庭をピックアップし、そうした家庭の中にある生活財の分析を通して、日本人に共有された生活スタイルをあきらかにしようとするものであった [佐藤 2004: 92-95]。つまり、「伝統社会」における建築研究を通過したモノ研究とは、そもそも問題設定の当初から異なるベクトルを向いているのである。

²¹ 私たちの日常がそうであるように、家屋に関する事ばかりではなく、社会に生起するほぼすべてのことに関しても同様であることは言うまでもない。